

日本植物学 昭和二十一年九月一日出版 第一二二号

ホトトギス

九月号



俳句随想〔四百二十三〕

汀子

俳句を作るとき、季題を初めに考えて作るか、見たものから生まれて来た一句に相応しい季題を後から持つてくるか、人それぞれの句作の過程がある。表現に固執するとき、見たものから触発されるのは人によって違ってくる。感じたことを同じ花を使つて表現しても、ある人は嫺やかと言ひ、ある人はしたたかと見る。俳句は短い詩であるから、その花を描写するだけで読者の受け取り方は様々になる。俳句は写生が大事である所以である。今尚、花筏を水面に浮かぶ落花として使つておられる句が多い。一般的には許容範囲としているのかも知れないが、花筏はその名前の花があり、花屑という季題がある以上、川面に流れる情景を花屑と使つて欲しい。

新樹光、晩夏光、などのわざわざ光と付けなくても、新樹、晩夏などというだけで、光の説明はいらぬのでは無いか。と、これは、何度も書いて来た。……が、まだまだ使われている。聖五月も、宗教的な表現で、五月はカトリックでは聖マリアの、月となつてゐる。それを知つていて作るならばいいであろう。

俳句は省略が武器である。必要のない言葉の説明は要らない。端的に、大切な言葉を使うことで、却つて、省略した以上の言葉の拡がりを読者に伝わりとほしい素晴らしい魔法である。何度も推敲し、省略して一句を大切に仕上げたい。添削は作者が自分でしなければならぬ。根本的に作者が作った句と違つたものになつたならば、それは自分の句ではなくなるかもしれない。

旬日記 汀子

平成二十八年九月三日 芦屋ホトギス会

大空を明け渡したる 鱗雲
占めてゆく庭の一劃竹の春
爽やかに朝帰りして来たりけり

九月四日 下萌句会

西瓜切るための人数揃はざる
芒叢靡きて風の通り道
霧晴れて刻々時間経つばかり

九月五日 ロイヤル俳壇

戸締りの早目に虫の夜を一人
稲妻や地球の未来浮き立たす
又逢へて秋めく心寄せ合へる
虫を聴く心となりてゆく夕べ
近道の花野を抜ける楽しみも

九月九日 工業倶楽部

夕月やはや来年の話など
夕月の沈む早さよ旅帰り
手を入れし芒の所在風まかせ

九月十一日 伝俳全国俳句大会

悲しみも喜びも抱き集ふ秋

九月十三日 大阪倶楽部

秋の夜の一人の自由とは淋し
露けしや稿債かかへたるままに
鉦叩はや巡り来し月日あり
秋の山ふと訪ねたき荘のこと

流星を見逃せし人なつかしき

九月十三日 綿業倶楽部

秋の蚊に追はれし如く家居して
流星に次務つ心ありにけり
一文を草す露けき夜を更かす
したたかに弱々しげに秋の蚊よ
流星を見るためホテルチェックイン

九月十五日 清交社

咲くまでの所在なかりし女郎花
芋の露触れて戻りし一人かな
台風の後残して行きし雨の朝
爽やかに健康を取り戻されし
秋の夜や昔話のとどまらず

九月十六日 アネモネ句会

踏み込みて踏み分けてゆく女郎花
雲とんで月に夜空を明け渡す
我が心写したまへと月仰ぐ
折りあり今宵の月を仰ぎつつ
雲払ひ払ひ天心月今宵

九月十七日 句会と講演の会

活けられて唯の芒でなかりけり
爽やかに今年も子規の墓前より
ふり返る一心爽やかなる忌日
爽やかな心抱きてぬかづきぬ
子規忌には会へならひとなりしこと

九月二十日 無名会

露けしと思ふ一と日を家居して

九月二十日 有恒俳句会

風の盆話題となりぬ旅心
もう一編書かねばならぬ夜長かな
鉦叩三十三回忌も過ぎ
爽やかに家居心となりゆける
台風過ぎゆくを聞く家居かな
台風に流れし会を惜しみけり

九月二十一日 きとらぎ会

台風の予定組み込む旅となる
稿債を楽しむ虫の宵なりし
萩の花雨滴と零れ風一過
台風の後姿を追うて旅

九月二十五日 北信越ホトギス俳句大会

室堂へ着き爽やかな深呼吸
山頂を隠す霧にも情けあり
雨も又自然の恵み秋深し
長き夜のいつまで続く旅話

九月二十八日 夏潮句会

露草を踏めば近づく川ほとり
疎開せし日々甦る速砧
邂逅や露草を踏み来し仲間
室堂の紅葉語らん旅仲間
立山の旅を語るも露けしや

九月三十日 時雨句会

山荘の霧に慣れねばならぬかな
霧抜けて抜けて山頂へとカーブ
立山の霧なき山路なりしこと
爽やかと思ふやうやく今日のこと

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十八年九月一日 夢三忌全国俳句大会

秋天に背伸びしてゐる榛名富士

九月二日 カトリック新聞選考時

盆の月忌心分ち合ふことも

九月三日 芦屋ホトトギス会

東京に雀のお宿竹の春

昨夜星を食みて太りぬ鰯雲

爽やかに一年振りといふ佳人

ホトトギス編集部てふ颯風裡

九月四日 野分会芦屋例会

野分後マザーテレサの慶事かな

九月四日 青嵐会芦屋例会

秋遍路夕日すとんと山の端へ

爽やかに俳磴壁を埋めゆく

爽やかに移転延期を告げる知事

九月八日 土筆会

三日の明日へと育ちゆく尖り

新月を確と見てある心の目

蟪蛄の星を目差してある眼

九月九日 六甲会

秋扇忌日の風を運び来る

甘いもの断ちて高きに登りけり

木道の尽きて広がる芒原

持ちくれし鷹羽芒といふ雅

九月十一日 日本伝統俳句協会全国大会

天守閣てふ露の世を知る高さ

秋灯を回し剣玉宙を舞ふ

九月十二日 朝日カルチャー若草句会

吾亦紅榛名の風を饒舌に

光年を繋ぐ旅人月の道

虫の音に虫の音重ね暮れゆける

吾亦紅揺れ草原の句読点

喜びに悲しみに月太りゆく

虫の宿百万石を奏でをり

九月十五日 登高会

待宵の少し欠けるといふ雅

雲払ひ待宵といふ露払ひ

爽やかに子規居士忌日重ねゆく

秋蝶の沈む草丈なかりけり

吹かれ来て秋蝶草に紛れざる

あの人もカープファンとや爽やかに

何もかも忘れることが爽やかに

九月十七日 子規忌ホトトギス社句会

かぐや姫還りて竹の実を結ぶ

子規偲ぶ十七日の満月に

爽やかな歴史を重ね子規偲ぶ

竹の実を結びこち亀最終話

杜鵑草供華の要として楚々と

九月十八日 青嵐会東京例会

駅降りて子規忌速夜の涙雨

蛇穴に入る名園の主として

虫の音の読経とも一忌日かな

昼の虫日差拒んでをりにけり

九月十八日 野分会東京例会

野分雲絡まつてゐる電波塔

葡萄踏む八頭身で十六文

葡萄園見てワイン蔵見て試飲

ミサイルの突き抜けてゆく野分雲

九月十九日 伝統俳句協会関東支部茨城部会

葡萄園風が解いてゆく香り

獺祭忌ワインを五本買ひもして

敬老の日や還暦は来年に

九月二十一日 蕉心会

気紛れな雲に秋日の淡々と

秋風や世の盛衰を見し大河

長き夜や一惑星の一史実

鯨の竿ぴくりと動き人居らず

秋の雲脱いでセスナ機現はるる

屋形船夜長に向けて試運転

萩揺れて昨夜の嵐の語部に

鯨釣の諦め早き竿捌き

九月二十四、二十五日 北信越ホトトギス大会

目の慣れて来れば広がる大花野

稜線を霧が包んでゆく静寂

越中の風に磨かれ蕎麦の花

初紅葉しつつ標高明かしつつ

道細る毎に立山粧へる

九月二十七日 若水句会

杜鵑草忌日の寺院埋め尽し

杜鵑草咲いて忌日の静けさに

秋鯖を食はせる嫁もなかりけり

九月二十八日 目黒学園句会

蓑虫の脈の通へる梢かな

立山の風は曲者蕎麦の花

昨日今日明日明後日も夜業かな

蓑虫の鳴けば戦後でありにけり

夜業の灯不夜城めける丸の内

雑詠 廣太郎 選

はらはらと散りひらひらと蝶となり 神戸 涌羅由美
 つばくらめ水面の影の追ひつかず 同
 暮れなづむ空に一閃夕つばめ 同
 春愁の髪を重しと思ひけり 同 立村霜衣
 語らふも都をどりを見し手つき 同
 行春の都の果ての暗さかな 同 竹下陶子
 敵前の 陽炎踏み 戦ひし 福山
 手話の手の素早く美しき春灯 同
 春光に躍りはじめし虫柱 同
 池心へと亀の背に乗る落花かな 東京 橋本くに彦
 花筵 四角 三角 丸に座し 同
 千年の松の色 添ふ桜かな 同
 ふふみてはころがすワインライラック 神戸 山田佳乃
 下駄はいて野火の匂ひの漢かな 同
 残花散る難波に赤穂義士の墓 同
 葉桜のころ人もまた美しく 同 和田華凜
 地車の音を遠くに聞く夕べ 同
 壬生念仏言はねばならぬ故無言 同

花ほどけゆくとき水面力抜く 龍ヶ崎 今橋眞理子
 人花に花は人へと紛れゆく 同
 青空へ雲へと落花吸はれゆく 同
 春惜む眩しすぎたる庭の日に 袋井 湖東紀子
 惜春の眼が追つてゆく鳥の声 同
 シャンデリアより春灯の乗かな 同
 二人居に一つ買ひたる桜餅 東京 今井千鶴子
 春雷の遠ざかるなくつと終る 同
 さりげなき仕事着夜は花衣 同
 全山の花へ朝日を放り出す 香川 湯川 雅
 蝶々の背景を蝶通りゆく 同
 草笛や頷くだけで済む返事 同
 いそしんでゐてあたかと思ひけり 熊本 岩岡中正
 わが肩に慈悲のごとくにふれて花 同
 地震越えてこそその桜と思ひけり 同
 目の前の花のさへぎる花の景 東京 山田閨子
 水色の空に触れたる峰桜 同
 午前九時宿の落花のはじまりぬ 同
 この春は老木に花の咲きにけり 神戸 後藤比奈夫
 満ち足りし鶯一羽紅梅に 同
 鶯は落着き梅は慌てをり 同
 鹿の角猿の腰かけ葉の日 同 藤井啓子
 学ぶとは残んの花に遊ぶこと 同
 風に閉づ東寺の桜絵巻かな 同

雑詠句評（八月号より）

霜衣・公次・さい雪
一步・仁義・しげ人
純也・雅・くに彦
住乃・廣太郎

蝶々と走るみどり児危なかし 東京 河野美奇

「みどり児」というのは、草木の緑の若々しさから来た言葉だそうである。だからこそ、「蝶々」と響き合うのである。広やかな野原が想像される。

のみならず、私には、上五の「チヨウチヨウト」という音が、「蝶々」という語意を離れて、一種のオノマトペのようにも感じられた。歩き始めたばかりの幼い子が、いつ転ぶかもしれない足取りで駆けてゆく。その様子が「チヨウチヨウ」というのは愛らしいと思ったのだ。「危なかし」はそんな愛らしさだろう。

（霜衣）

最近歩きスマホ等と、他の事をしながら歩いて危険が指摘さ

れたりしているが、蝶を見つけた子供が、その蝶を追いかけているのだ。時に子供はあるものに気をとられるとそちらに夢中になり、周りがついつい見えなくなってしまう。微笑ましさと、不安の交錯した不思議な魅力がある。（廣太郎）

着ぐるみの頭を取りて花人に 渡川 山本素竹

何かのイベントがあり、動物（おそらく）の着ぐるみを着て山演をしていた人が、イベントも終り、関係者の慰労の花見の席で、顔の部分だけ浮世の人間に戻って花見を楽しんでいる光景。その姿が何ともユーモラスで、花見の席の雰囲気までも盛り上げている。そこに作者は面白さを感じられたのだろう。（公次）

実は筆者も一度着ぐるみを着た事があり、夏だったので重さと暑さで参った記憶があるが、花見のイベントでアルバイトでもしているのだろうか。その時間も終り、キャラクターの頭の部分か脱いで、そこから花人になった、というギャップが楽しく語られている。桜の美しさも伝わってくる。（廣太郎）

〈以下略〉

天地有情

晴つづき吉野の花も早からん
 みよし野の花外遊のはなむけに
 明るさを秘めて千両日を弾く
 千両や色無き庭を灯し初む
 風立ちてたちまち春の行く思ひ
 会へばすぐ昔の話 柏餅
 芽吹かんとしてふくらんでゆける幹
 はくれんを故郷のやうに仰ぎけり
 新緑に新緑を塗り重ねたる
 家ぬちに居ればどこかに若葉冷
 冗談と嘘斯くちがひ四月馬鹿
 フエールセーフールプルーフ四月馬鹿
 みな同じさみしさ抱きて春惜む
 戒名に紫英とありて藤の花
 満開の花に力をもらひけり
 もう少しこの世に居たし花吉野
 七十年経ちし玉音終戦日
 耳うちをする口隠す秋扇

長岡 安原 葉
 同 稲畑廣太郎
 同 今井千鶴子
 熊本 岩岡中正
 同
 神戸 三村純也
 同
 同 後藤比奈夫
 同 和田華凜
 同
 東京 岩村恵子
 同
 福山 竹下陶子
 同

猿帰りゆきたる山に春の月
 卒業の子よりも母の誇らしく
 後取りは二十六歳武具飾る
 苦にならぬ早起花の山とこそ
 つゝと来てつゝつゝと走す雉子かな
 火山灰原の葎に消えし雉子かな
 初雲雀空は無限の青さかな
 あてもなく歩いてをれば春の雷
 花人となりゆく吾の歩老いとなる
 通院の通ひ路突と花下となる
 ユネスコに日本の俳句推す虚子忌
 東京の子を訪ふ母の虚子忌旅
 花の精鎮めの雨となりし宵
 祖く春の年尾一ト世の世界展
 琵琶湖より安曇川に沿ひ鳥帰る
 伸びきらぬままに摘まれし土筆かな
 初秋の色あをぞらの真ん中は
 何もかも濡れ初秋の香となりぬ

相模原 木村享史
 同
 東京 山田闈子
 同
 群馬 中杉隆世
 同
 神戸 浜崎素粒子
 同
 熱海 嶋田一步
 同
 東京 大久保白村
 同
 神戸 千原叡子
 同
 吹田 大橋 暁
 同
 東京 今井肖子
 同

花子選